

『正法眼蔵』の時間と『コヘレトの言葉』の時間*

橋本 邦彦

The Time in *Shohogenzo* and the Time in *Ecclesiastes*

Kunihiko HASHIMOTO

Abstract : In addition to the time computed physically, we have the experiential time that is recognized by the subject. Dōgen, who was a sophisticated philosopher as well as a *Zen* monk in the Kamakura period, shows that time and existence cannot be separated from each other. On the other hand, *Ecclesiastes* (The Words of Koheleth), a book of *The Old Testament*, considers time as an event phenomenon which proceeds to the future dynamically, implying the existence of God. Although apparently differing about how to conceptualize time, those two, in fact, have a critical common point to share.

キーワード : Experiential Time, Existence, Circulation, Repetition, State

1. 時間とは

時間は、私たちの日常にとってあまりにも当たり前の概念であるにもかかわらず、いざ説明しようとなると、はなはだ困難を感じる。初期キリスト教の教父アウグスチヌス（396 - 430）は『告白』の中で、次のように述べている。

（1）ではいったい時間とは何でしょうか。だれも私にたずねないとき、私は知っています。たずねられて説明しようと思うと、知らないのです。しかし、「私は知っている」と、確信をもって言えることがあります。それは、「もし何ものも過ぎさらないならば、過去の時はないであろう。何ものもやってこないならば、未来の時はないであろう。何ものもないならば、現在の時はないであろう。」ということです。⁽¹⁾

時間は時計の中にあるのでも、カレンダーの中にあるのでもない。時間をとらえようとする、それはたちまちとらえどころのないものになる。けれども、時間は確かにあるということ、私たちは知っている。流れゆくものとして、あるいは過ぎ去るものとして知っているのである。

時間には、二つのタイプが考えられる。

(2) 二つのタイプの時間

a . 物理的時間：客観的に数量化され算定できる時間。

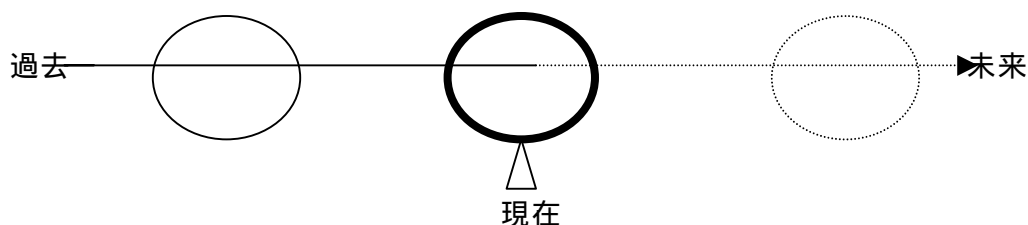
例 . 地球の運動（自転、公転）で測られる時間；分子の振動を基に測られる時間（ポワンカレの規約主義）；知覚・認知的処理の時間；距離に読みかえられる時間。

b . 経験的時間：主体者により認識される時間。

例 . 存在者の存在を支える現象学的な、あるいは実存的な時間；出来事に還元される相対的な時間。

時間は、一般的に、左から右に向かって進む直線として概念化される。

(3) 時間の図式



過去から現在を介して未来へと延びていく時間軸に沿って、楕円で表した時点が一方方向に移動していくものとして時間を捉える。⁽²⁾

この論文の目的は、(2 b)で挙げた「経験的時間」を、仏教の立場にある『正法眼蔵』の「有時」の章と、ユダヤ・キリスト教の立場にある『旧約聖書』の「コヘレトの言葉」では、各々、どのように捉えているかを探り、両者の相違点と共通点を明らかにするところにある。

2 . 『正法眼蔵』の時間

『正法眼蔵』で「有時」は、次のように定義されている。

(4) 有時：時間がそのまま存在であり、存在がごとく時間である。

「いはゆる有時（うじ）は、時（じ）すでにこれ有（う）なり、有はみな時なり。」[ここで言う有時というのは、時（時間）がすでに有（存在）であり、有はみな時であるということである。]⁽³⁾

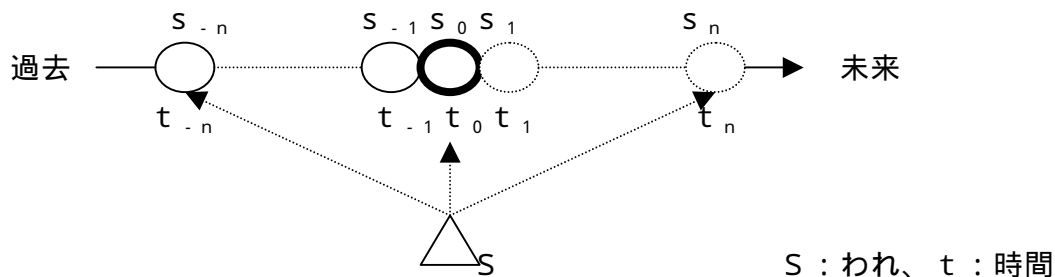
ここでは、存在と時間の区別はない。両者は一体である。「有」は物質的な存在（モノ）だけでなく、出来事としての存在（コト）も示す。「時」は時間軸上の任意の二点間の長さではなく、時の流れそのものを指す。

「有時」とは、時間と存在が一つであるという現実のあり方である。

- (5) 「松も時なり、竹も時なり。時は飛去(ひこ)するとのみ解会(げえ)すべからず、飛去は時の能とのみ学すべからず。……要はとりていはば、尽界にあらゆる尽有(じんう)は、つらなりながら時時なり。有時なるによりて吾有時(ごうじ)なり。[松も時である、竹も時である。時というのは飛び去るものとばかり理解してはいけない。飛び去ることが時の得意とするところだと学んでもいけない。……要するに、全世界のあらゆる存在は、連なりながらその時その時なのである。存在と時間はひとつであるから、私と存在と時間はひとつである。]
- (4)

(5)の考えに即して、玉城(1983:60)⁽⁵⁾は、「われ(=自己)」の持続的配列を「われ(=自己)」が見ている状況が「有時」だと解釈する。これを試みに図で示すとするなら、次のようになるだろう。

(6) 「われ(=自己)」の持続的配列



(6)において「われ」は継起的順序で切れ目なく配列されている。どの「われ」を選んでも、それは同じ「われ」である。この「われ」の配列を自覚する「われ」が見ているところに、存在と時間の一体化が成立する。

時間軸上に配列された「われ」は、いわば過去から未来へ向かって一方向的に移動する時点に乗っている。この状態では、過去、現在、未来のどの任意の時点の「われ」を選んだとしても、常に「いま」であり、その意味では、無時間的である。この「われ」の無時間性は、道元の説く「而今(にこん)」=「まさに今(just now)」に通じるように思われる。

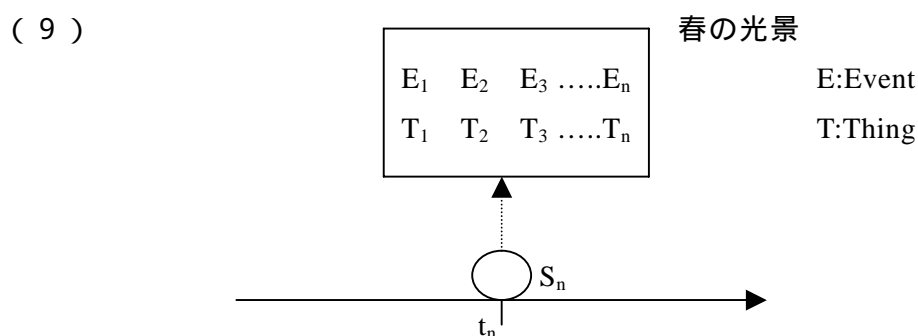
- (7) 「たとえば、河をすぎ、山をすぎしがごとくなり。いまはその山河(せんが)たとひあるらめども、われすぎきたりて、いま玉殿朱桜(ぎよくでんしゅろう)に処せり。山河とわれと、天と地となりとおもふ。しかあれども、道理この一条のみにあらず。いはゆる、山をのぼり河をわたりし時にわれありき、われに時あるべし。われすでにあり、時さるべからず。時もし去来の相にあらずば、

上山の時は有時の而今(にこん)なり。時もし去来の相を保任(ほにん)せば、われに有時の而今ある、これ有時なり。」「たとえば自分は河や山を過ぎてきたというようなものである。今はその山も河もその場所にあるであろうが、私は今は美しい御殿にいる。そして山や河や私とは、天と地ほどに隔たってしまったと凡夫は思う。しかしながら真実の道理はそれだけではない。というのは、山を上り河を渡ったときに私があった、その私に「時」というものがあるのである。私はすでにこうして存在している、その私から「時」は去ってゆくはずはない。「時」がもし過ぎ去ってしまったり、やって来たりする相(ありよう)でないとしたら、山に登ったとき、その時が「有時」(時間と存在がひとつである)の「而今」(まさに今)である。したがって「時」がもし過ぎ去ってしまったり、やって来たりする相を保っているとするれば、私に「有時」の「而今」がある。これが「有時」ということである。】⁽⁶⁾

「有時」には(6)の継起的側面のほかに、同時的(並列的)側面がある。それは「経歴」(きょうりやく)という言葉で表されている。

(8)「経歴は、たとえば春のごとし。春に許多般(こたはん)の様子あり、これを経歴といふ。……たとへば、春の経歴はかならず春を経歴するなり。経歴は春にあらざれども、春の経歴なるがゆゑに、経歴いま春の成道(じょうだう)せり。」
[経めぐるということは、たとえば春のようなものである。春は、さまざまな光景を呈している。それを経めぐるというのである。……たとえば、春が経めぐるということは、かならず春を経めぐるっているのである。経めぐることが春ではないけれども、春が経めぐるのであるから、経めぐりがちょうどいま、春の時点で現われているのである。】⁽⁷⁾

「経歴」において、時間も世界全体も経めぐる。時間は「春のようなもの」である。鳥の飛翔やさえずり、蝶の乱舞、咲きほこる花々、霞たつ空、心地よい微風などが一幅の絵画のように春の一望の中におさまっている。これを図示すると、次のようになる。



春は、様々な光景を見せている。個々の光景には、行為、過程、変化を含みもつコト的なものや、状態を含みもつモノ的なものがある。これらの様々な光景を同時的・並列的に任意の時点の「われ」が眺望すると、一つのまとまりのある存在の状態として捉えることができる。継起的な自己の配列の中で、任意のどの時点の自己も、「経歴」という名の下に把握された包括的な状態存在内に宿る時間を一挙に見ているわけである。

3. 『コヘレトの言葉』の時間

この文書は旧約聖書中の諸書に属し、ダビデの子ソロモンの言葉とされる。実際は、紀元前3世紀後半、エルサレムの富裕な階層に属する知恵の教師により執筆されたと考えられる。⁽⁸⁾

旧約聖書の時間観は、概ね、次のように要約することができる。

(10) 神が時間を創造した。

a. そのとき、神が「光よ、あれ。」と仰せられた。すると光ができた。

..... 神はこの光とやみを区別された。神は、この光を昼と名づけ、このやみを夜と名づけられた。こうして夕があり、朝があった。⁽⁹⁾

<創世記 1・3, 5>

b. 世界は時間において造られたのではなく、時間とともに造られた。⁽¹⁰⁾

<アウグスチヌス『神の国』11巻6章>

神の創造の瞬間から時間は動き始める。その瞬間を定点として、そこから未来へ向かって引き延ばされたものとして時間をとらえていく。時間の延長の限界を人間は知り得ない。人間にとって時間は永遠の領域に属するのである。

「永遠」(ヘブライ語で *olam*) は、デヴィドソン(1996:53)によると、「過去から未来へ無限に続いている時」を意味する。⁽¹¹⁾ コヘレトの言葉は、次のように語る。

(11) 「人の心に永遠への想いを与えた。ただ人は神が始めから終わりまでなさるみ業に出会えないだけだ。」(3・11)⁽¹²⁾

コヘレトの言葉3章1～15節は、「時の定め」について書かれている。

(12) 時の定め(3・1): 出来事に内在する時(ヘブライ語で *kairos*)。

定められた時のない出来事は存在しないこと具体例として、3章2～8節が記されている。

(13) 植えるに時があり、植えられたものを抜くに時がある。

殺すに時があり、医（いや）すに時がある。
壊すに時があり、建てるに時がある。
泣くに時があり、笑うに時がある。
歎くに時があり、踊るに時がある。
石を投げるに時があり、石を集めるに時がある。
抱くに時があり、抱くことから離れるに時がある。
探すに時があり、失うに時がある。
守るに時があり、棄てるに時がある。
裂くに時があり、縫うに時がある。
黙するに時があり、語るに時がある。
愛するに時があり、憎むに時がある。
戦いの時があり、平和の時がある。⁽¹³⁾

ここでは、時と出来事とは等価である。時間なくして出来事はなく、出来事なくして時間はない。しかも、出来事としての時は神により定められ、人間の側でどうこうすることもできない。ツィメリー(1991:275)は、次のように言う。

(14)「コヘレトの神は、あらゆる運命、あらゆる時、あらゆる偶然の支配者であり続ける。人間には、時を掌握しそれを意のままにすることは断固として根本的に拒まれている。」⁽¹⁴⁾

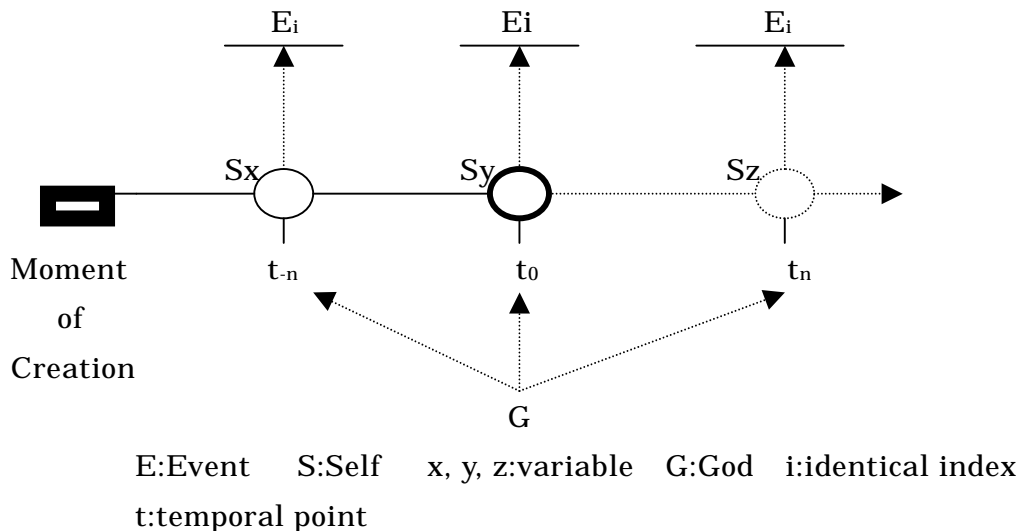
コヘレトの言葉の時間はコト的であるだけでなく、反復的でもある。出来事と時間は等価なのだから、出来事の反復性は時間の反復性でもある。

- (15) a . 歴史の反復性 : 「代は去り、代は来る。」(1:1)
b . 自然現象の反復性 : 「陽は昇り、陽は沈む。そして昇ったところへ喘ぎつつ帰って行く。」(1:5) ; 「南へ行き、北へめぐり、めぐり行くのは風、めぐりめぐって元に帰るのは風。」(1:6) ; 「すべての川は海に注ぐが、海は満ちることがない。川が注ぐその所、そこへと川は帰って行く。」(1:7)
c . 人間の営みの反復性 : 「先にあったことはまたあるだろう。先に為されたことはまた為されるだろう、陽の下に新しいものは何もない。」(1:9) ; 「見よ、これを、それは新しいと、人が言えることがあるだろうか、すでにそれは昔からあったし、われらの前にあったことだ。」(1:10) ; 「在ることはすでに前から在ったのだし、これから起こることもすでに在ったこと。」(3:15)⁽¹⁵⁾

人間は今まであった出来事を違ったふうにしようとしてもできないし、これから起こ

る出来事もこのようであり続ける。なぜなら、神は同じことが繰り返し繰り返し起こるように定められたからである。⁽¹⁶⁾ 神の目からは必然であっても、人間の目から見れば偶然によって支配された世界にあっては、すべてのことは永遠に繰り返すばかりで新しいものはなく、ただ画一的に生じるばかりである。神の時間の永遠性の中での出来事の反復性を図示すると、次のようになるだろう。

(1 6)



創造の瞬間から永遠へと流れゆく時間の中で出来事が生じる。出来事は参与者を変えて繰り返されるので、過去の出来事 $t_{-n}(E_i)$ も現在の出来事 $t_0(E_i)$ も未来の出来事 $t_n(E_i)$ も同一のものとして把握される。反復性は、時間の不特定性を示し、無限に引き延ばされた時間のスパンでは状態性を表すことになる。この状態性を神は時間軸の外から全体としていっきょに見渡しているのである。

4 . 結論

『正法眼蔵』の時間認識と『コヘレトの言葉』の時間認識の共通点と相違点は、次のようになる。

(1 7) 共通点 :

- a . 両者とも時間を状態として認識する。『正法眼蔵』では、出来事 (コト的な存在) 状態 (モノ的な存在) を包括する「経歴」として状態化するのに対し、『コヘレトの言葉』では、出来事 (コト的な存在) を繰り返し起こる反復性として状態化する。
- b . 両者とも時間と存在を一つのものとして認識している。ただし、『正法眼蔵』では、コト的な存在とモノ的な存在を同じレベルで捉えるが、『コヘレトの言葉』では、モノ的な存在はコト的な存在の中に含まれて

いる。

(1 8) 相違点 :

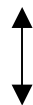
- a . 『正法眼蔵』の状態把握は、継起する時間の「まさに今」という任意の時点におけるものであるのに対し、『コヘレトの言葉』の状態把握は、継起する時間の全体の眺望の中でのものである : ミクロ的状态認識 v s . マクロ的状态認識。
- b . 認識する主体は、『正法眼蔵』ではあくまでも「われ (= 自己)」であるのに対し、『コヘレトの言葉』では絶対者なる神である (「われ」は個々の出来事の参与者にすぎない)。

『正法眼蔵』では、「経歴」として包括された世界全体は、「われ」の中にすっぽりおさまり、その「われ」を自覚する意識としての「われ」が認識するという思想をもっている。他方、『コヘレトの言葉』に代表されるユダヤ/キリスト教では、「われ」が世界の中に含まれていて、世界全体は神という絶対者が自覚的に見ているという思想である。人間には神によって付与された「永遠への想い」があるだけである。これにより人間は、自らが参与する出来事を認識すると同時に、過去から未来へと流れる継起的な時間を意識することが可能となるのである。

『正法眼蔵』と『コヘレトの言葉』は、時間の状態認識、及び時間と存在の一体化という共通項を保持しつつ、次のような対称的な世界観をもっていると考えられる。

(1 9) 対称的な世界観

『正法眼蔵』: 「われ」の一点におさまる世界
(極小の中にすべてがある)



『コヘレトの言葉』: 「神」のまなざしにおさまる世界
(極大の中にすべてがある)

* 謝辞

この論文は、2001 年度 9 月 25 日・26 日開催の第 3 5 回室蘭認知科学研究会 (室蘭工業大学) での発表を基にして執筆された。貴重な意見やコメントをして下さった研究会の参加者に心よりお礼を申し上げます。また、旧約聖書に関する貴重な文献を提供して下さいました桑原博文氏に、この場を借りて謝意を表したい。最後に、論文を審査して下さいました二名の査読者に感謝したい。

注

(1) : 山田晶編集 . 1 9 7 8 . 『アウグスチヌス ~ 告白 ~ 』 . 中央公論社 . 東京 .

(2) : Reichenbach, Hans. 1947. Elements of Symbolic Logic. The Free Press. New York.

- (3): 角田泰隆. 2001. 『禅のすすめ～道元のことば～下』. NHK出版. 東京.
- (4): 同上.
- (5): 玉城康四郎. 1983. 『道元～正法眼蔵(抄)～』. 中央公論社. 東京.
- (6): 角田泰隆. (3)と同じ.
- (7): 玉城康四郎. (5)と同じ.
- (8): 新共同訳旧約聖書注解 『コヘレトの言葉』. 1994. 日本基督教団出版局. 東京.
- (9): 新改訳聖書. 1981. 日本聖書刊行会. 東京.
- (10): アウグスチヌス. 1968. 『神の国』. 日本基督教団出版局. 東京.
- (11): デヴィドソン, R. 1996. デイリー・スタディー・バイブル16 『伝道の書・雅歌』.
新教出版社. 東京.
- (12): 関根正雄訳. 1995. 新訳旧約聖書第 巻 『諸書』. 教文館. 東京.
- (13): 同上.
- (14): ツィメリー, ワルター. 1991. A T D 旧約聖書注解 15 『伝道の書』. A T D・N T D 聖書
註解刊行会. 東京.
- (15): 関根正雄訳. (12)と同じ.
- (16): デヴィドソン. (11)と同じ.

参考文献

- 新共同訳聖書～旧約聖書続編つき～. 1987. 日本聖書協会. 東京.
- 道元. 水野弥穂子校注. 1990. 『正法眼蔵(二)』. 岩波書店. 東京.
- Wilson, Robert A., and Frank C. Keil. 1999. The MIT Encyclopedia of the Cognitive Sciences. The MIT Press.
Cambridge, Massachusetts.

執筆者紹介: 橋本 邦彦

所属: 室蘭工業大学 共通講座・言語科学講座

Email: kuni3587@mmm.muroran-it.ac.jp